研究ノート

永山城跡

浦　井　直　幸

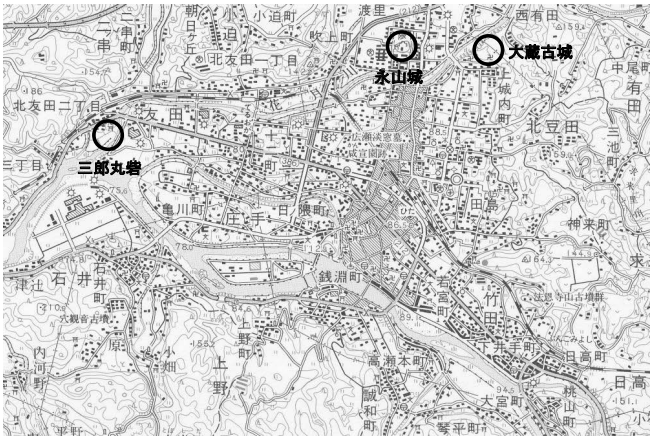
はじめに

永山城は、大分県日田市丸山の通称月隈山に所在する（第１・２図）。城内の石垣築石部に玉石（川原石）を使用することで著名である（写真１）。平成20・21年度、月隈山管理道整備に伴う予備調査が日田市教委により行われ、大手門虎口北側石垣などが調査された（日田市2011）。平成23・24年度、日田市や調査の一部委託を受けた別府大学文化財研究所による発掘調査が行われた。本丸部の礎石や北側斜面部の石垣検出などの発掘成果に加え、文献・植生・石造物など盛り込んだ報告書が刊行されている（日田市2013）。平成28年２月、城跡は大分県により史跡指定されたが、その約２か月後、熊本地震により城跡の代名詞というべき大手門櫓跡の石垣が崩落した。平成30年までに石垣は修復されている。

令和２年、筆者は永山城跡の縄張りについて一般向けに紹介する機会を得、縄張り図の作成を行った。本稿はその際の所感を上記調査成果を取り入れながらまとめたものである。

第１図　永山城跡位置図

写真１　大手門（曲輪Ｅ）の石垣（2011年撮影）



第２図　永山城跡周辺図

１．遺構の状況（第３図）

〈立地〉

永山城跡は標高約 30 ｍの独立丘陵に所在する。城跡の現状は南側に堀跡があり、近世の絵図では北・東・西は堀が描かれているが、現状では埋められており、一部に駐車場やトイレなど公共施設が建つ。

第３図　永山城縄張り図（1／2000）

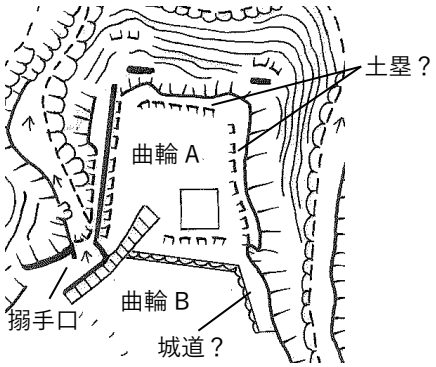
〈歴史〉

調査報告書によると現在見ることのできる城跡の姿は、慶長６年（1601）に入部した小川壱岐守光氏によるものという。小川氏は入部直後、約3㎞南東にある星隈山の三郎丸砦に入り、３年後の慶長９年（1604）に月隈山へ移ったという。築城当初は「丸山城」と呼ばれたが、元和２年（1616）に入部した石川忠総により「永山城」と改称された。石川氏は寛永10年（1633）に転封し永山城は廃城となる。正保年間（1644～1648）の「正保絵図」にも永山城は廃城として描かれているという。ただし、その後も永山城の管理は続いており、寛文５年（1665）、熊本藩の預り地となった際は古城番が置かれ、翌寛文６年（1666）には、城の北西に堀（肥後殿堀・肥後ドンブ（ボ）リ）を掘って備えを厳重にしたという。天和２年（1682）、新領主の松平直矩が永山城に入り、転封後、貞享３年（1688）に小川藤左衛門が入り代官所とした。その頃、南堀の外側に日田代官所（日田陣屋）が設置されたと考えられ（豊田2013）、政務を行う場としての永山城の利用は減少したと見られる。江戸時代後期は城内に５つの社殿や祠が存在したとされ、領民の崇敬を集め、代官や郡代の接待や展望の場としても利用されたという。

〈構造〉

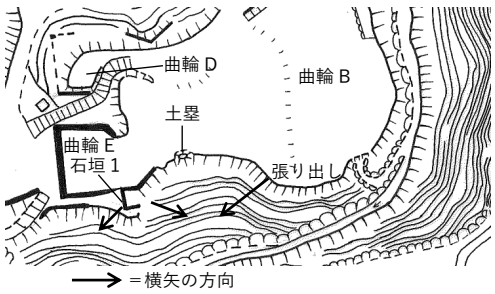
平面三角形状の丘陵の頂部に天守台を備えた本丸を有す。各遺構の発掘調査成果や石垣の形態は調査報告書に譲り、以下新たに確認した事項、所感について記述する。なお、曲輪名称のアルファベットは新たに付けた「Ｐ」以外、日田市2013例言永山城跡施設名称に依った。

曲輪Ａは天守台である（第４図）。今回塁線に平行するように土塁状の低平な高まりを確認した。東屋建設の際の造成痕の可能性もあるが念のため記しておく。次に、天守南東角から曲輪Ｂに下る箇所にスロープ状の地形があるが、これは曲輪Ｂから天守台へ至る往時の城道と考えられる。



第４図　曲輪Ａ（天守台）アップ

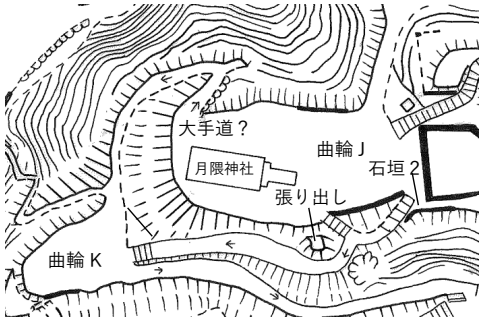
曲輪Ｂは調査により礎石が確認された東西約51ｍ、南北約37ｍと城内で最も大きな空間である。曲輪内を観察すると微妙な高低差がありいくつかの曲輪がかつて存在したことを窺わせる。曲輪Ｄ・Ｅは曲輪Ｂと地続きの石垣を備えた櫓台空間である。大手口とされる虎口は左折れの内枡形とする。曲輪Ｅ（南櫓台）の南塁線には一段下がった個所に「コ」字状の石垣１が張り出す（第５図）。これは曲輪Ｂ南斜面に取りつく敵兵に強烈に横矢を射かけるための足場と



第５図　曲輪Ｂ・Ｄ・Ｅアップ

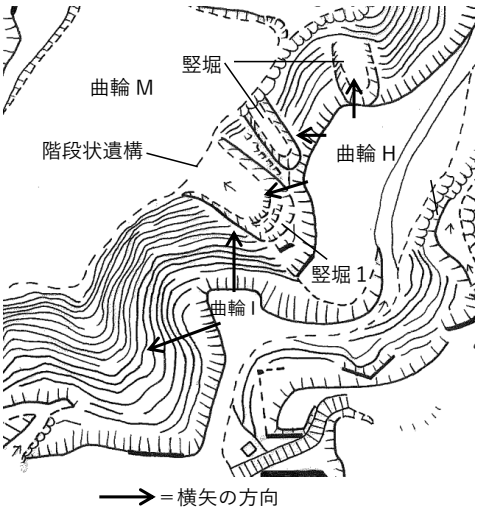
考えられる。曲輪Ｂ南斜面は城内の他所と比べて緩斜面であり、曲輪Ｂ南塁線の張り出しも横矢掛けを意図とした造作と考えられる。斜面の上部には土塁も認められるなど極めて防御の意識が強い。なお、この石垣１は南西の緩斜面にも横矢を掛けられる位置にあり、その重要性から石垣を備えた台として整備されたものと理解される。

大手口の櫓台は西眼下に月隈神社が鎮座する東西方向を主軸とする曲輪Ｊを見下ろす（第６図）。文化15年（1818）の整備とされる城内道が南斜面下にある。城内道は南麓の曲輪Ｎから延び、曲輪Ｋ付近から東に向きを変え、途中南側に屈曲する。これは曲輪Ｊ南斜面に突き出した張り出し部による影響を受けたもので、この張り出しは曲輪Ｋから進みくる敵兵に備えた城郭遺構と思われる。この城内道をさらに進むと月隈神社に向かう道と櫓台へ向かう東の道に分かれる。東の道を登りつめると大手口の櫓台直下にたどり着く。曲輪Ｊを経由することなく、容易に城郭主要部へ到達できることから、曲輪Ｊ南斜面の城内道は築城当時からの大手道とは考えにくい。大手道は曲輪Ｊ北西角から曲輪Ｋへ湾曲しながら下る道と推定される。東の道の塁線上部には石垣２が認められる。この石垣は緩斜面からの侵入を意識した遺構と思われ、曲輪Ｊ北塁線にも緩斜面の上部にあたる位置に石垣が構築されている。



第６図　曲輪Ｊ・Ｋアップ

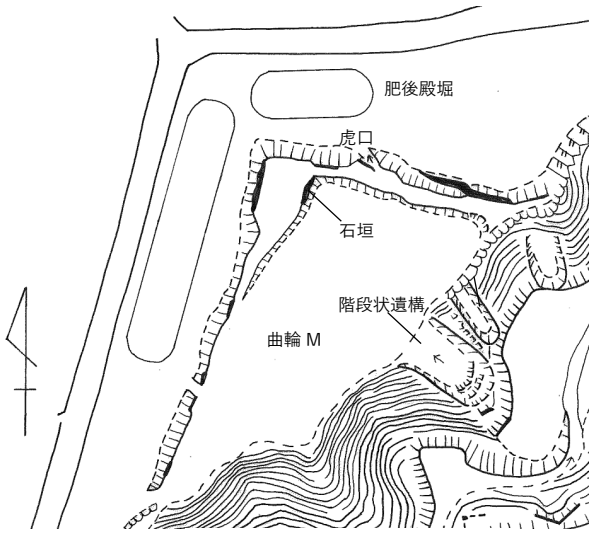
曲輪Ｊの北は方形状を呈する曲輪Ｉがある（第７図）。この曲輪からは先述の曲輪Ｊ北斜面の侵入者に対する横矢掛けを可能とする。また、北斜面にある幅10ｍ、長さ20ｍの規模の大きい竪堀１をも見下ろす位置にある。曲輪Ｉから小道を経由して曲輪Ｈに至ると南端部に石垣があり、石垣が面する斜面下には竪堀１が構築されている。竪堀１の下端部付近の発掘調査では階段状遺構が検出されており、曲輪Ｈに至る連絡通路と想定されている。おそらく竪堀を通路としても利用したのであろう。なお、今回の調査で曲輪Ｈ北斜面にさらに２本の竪堀を確認した。西側の竪堀は低平な土塁を伴う。これらの竪堀を望む西塁線は張り出しを有す。曲輪Ｈの北端部は曲輪Ｈよりわずかに高い曲輪Ｇがある（第３図）。この曲輪は橋頭保的に北に張り出しており、北・西・東を望むことができる。特に東斜面下には井戸のある曲輪Ｆがあり、その方面からの侵入者に重点をおいた曲輪とみなしてよい。



第７図　曲輪Ｈ・Ｉ・Ｍアップ

曲輪Ｇと繋がる曲輪Ｐはこれまで特に曲輪として取り上げられていないが、曲輪Ｆのみならず東斜面を抑える格好の箇所に位置しており城郭遺構と考えられる。

曲輪Ｍは北西の山裾に展開する（第８図）。北と西塁線に土塁・石垣が巡ることが既往調査により確認されているが、今回北西角部の土塁内側でも石垣を確認した。また、北塁線の中ほどに堀側へ下りるように虎口と考えられる開口する箇所がある。この付近の堀は肥後殿堀と呼ばれ、18 世紀代の加藤家絵図（日田市 2013 所収）には北側の延長線付近に外堀に掛かる橋が描かれており、城外からの連絡路が存在した可能性がある。本虎口から先述した竪堀１の階段状遺構へと繋がる道が曲輪Ｍ内に設定されていたのであろう。



第８図　曲輪Ｍアップ

２．若干の考察

形態的諸特徴の評価

本城郭は丘陵全体に遺構を展開させ、所々に石垣を構築する特徴がある。ただし、すべての塁線を石垣で固める総石垣化は目指しておらず、本丸部では天守部、虎口部に集中する。本丸以外の曲輪では丘陵斜面の谷頭や竪堀上部の位置に構築されており、斜面下からの侵入者に備える位置に石垣を構築している。

丘陵部の各曲輪には要所に張り出し部が設けられている。戦時を想定した構築者の緊張感が伝わる縄張りであり、城郭全体を堀で囲繞する形態と合わせて極めて防備力の高い城郭であるといえる。

永山城は慶長６年（1601）に入部した小川光氏が３年をかけて築城したという。現在目にすることのできる丘陵部の曲輪虎口や緩斜面上部の石垣の構築は小川氏によるものと推測される。また、先述した多数の張り出し部の造作は強く戦時を想定したものであり、17 世紀初頭という政情不安定な時期に入部した同氏による整備と推定できる。

それではそれ以前の永山城の姿は現在の遺構からどこまで追えるのであろうか。「豊後国志」月隈城の項に「昔時城主これ詳らかならず。慶長六年小川壱岐守光氏これを改築す。」とあり、慶長６年（1601）の小川氏入部以前に城郭が存在した可能性が高い。発掘調査では14～16世紀の遺物の出土が報告され、曲輪配置のあり方から中世城郭を近世城郭に改修した可能性に触れている。筆者もその可能性は高いと考えており、曲輪そのものの配置状況に中世段階も大きな変化はなかったと推測する。竪堀１については規模が大きく、裾部に階段状遺構も構築されていることから、小川氏段階まで下るかもしれないが、その北側に設けられた竪堀２本は規模や散在的な配置から中世にまで遡る遺構の可能性がある。

次に堀について考えたい。永山城を描いた絵図を見ると堀は水を湛え、月隈山の麓を囲繞するように描写されている。北西角の肥後殿堀付近の堀は、熊本藩の預り地となった寛文６年（1666）に以前からあった堀を改修したものという。「御城山ニ而近日炭焼居」「前代未聞」などの記録（木村1972）が改修理由である。この記録から、城郭の北西麓は炭焼き人がある程度自由に出入りできる状態であり、堀幅は狭く深さも浅い小規模のものであったことを暗示している。改修後は投身自殺者が度々出るほどの規模となっており、現在想定されている堀幅に近い形状になったと思われる。また、北東の堀は『永山布政所史料』によれば「昔から空堀であった」とされる。「昔」がいつの時点を指すのか、また「空堀」が水堀も含めた意なのか不明であるが、改修前の肥後殿堀付近の形状も含め、興味深い記述である。これらの堀の形や機能した時期が中世期まで遡るのか、永山城北斜面に位置する竪堀群との関連などを含め今後検討すべき事項と考える。

おわりに

ここまで縄張り図作成の際の所感とこれまでの研究成果を交え、永山城跡について考察してきた。本城郭の各時期における姿について推測の多い記述となった。発掘調査などによりこれらの点が明らかにされることを期待したい。以下に本報告の要旨を箇条書きにしてまとめとする。

・永山城跡は、慶長６年（1601）に入部した小川光氏が、月隈山に存在した中世城郭を近世城郭に改修したものと考えられる。

・小川氏の改修は、天守や本丸の虎口部、各曲輪の谷頭などの要所部に石垣を構築し、各曲輪の塁線に張り出しを持たせた戦時を強く想定したものであった。

最後に蛇足ではあるが、曲輪Ｇ東斜面にて凝灰岩の岩崖に突き刺さる鉄釘を１本確認した。採石の痕跡かと思われたが、筆者は釘で採石する例を知らない。釘が打たれた用途・時期共に不明であるが興味を引く事象であるため付記しておく。

写真２　曲輪Ｇ東岩崖に残された釘

参考文献

・木村忠夫「千原幸右衛門家日記」『九州文化史研究所紀要第 17 号』1972 年

・日田市教育委員会『永山城跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第 99 集 2011 年

・日田市教育委員会『永山城跡Ⅱ』発掘調査概要報告書 2013 年

・豊田寛三「第 6 章 永山城と永山布政所について」『永山城跡Ⅱ』2013 年